

# 『論語義疏の研究』論文概要

高橋 均

## （一）皇侃と『論語義疏』

本書で研究の対象とする論語義疏十卷は、梁の皇侃（齊・武帝永明 6 年 488—梁・武帝大同 11 年 545）が、魏の何晏（190—249）の『論語集解』にもとづいて作った『論語』の注釈である。経書の注にさらに注釈を施したものを「義疏」という。

その論語義疏は、論語集解に忠実に従った解釈を軸とし、江熙の『集解論語』から引いた論語説で構成されている。その結果、論語義疏は論語集解によった注釈であるように見せながら、その実、論語集解の枠を超えた解釈となっているのである。

皇侃の生きた時代、義疏という学問が盛行していたことは、『隋書』『経籍志』の記載から見てとれる。義疏は、論語だけに作られたものではなくて、『易』『書』『詩』をはじめとする経書のすべてに作られていた。しかし魏晋から六朝時代を中心として行われた義疏の学問は、後に急速に廃れてしまう。その原因は、経書に「正義」と呼ばれる国家公認の注釈が作られたこともあるが、論語義疏で見たような、多様な性格をもつ義疏のなかにも内在していたと考える。

魏晋六朝時代の思想史を研究する時、義疏の研究は欠かすことはできないが、今伝わるものはいずれも断片である。完本として唯一残るのが、本書が研究の対象とする皇侃の論語義疏十卷である。この論語義疏も、日本に室町時代の旧抄本が 20 数点伝わるのみで、中国においては南宋末から元の頃に散佚している。日本に伝わる論語義疏に対して唯一の異本が、中国敦煌より発見された唐代写本の敦煌本『論語疏』（P 3573）であるが、残念ながら残巻である。

論語義疏はこれまでも日本、中国において多くの人によって研究されてきたが、用いられるテキストは根本校正本論語集解義疏、またはこれの翻刻本、あるいは武内義雄校訂論語義疏によるもので、写本にまでさかのぼる研究はほとんどされてこなかった。本論文は旧抄本論語義疏としてもっとも優れている天理大学附属天理図書館蔵清熙園本論語義疏を用い、敦煌本論語疏との双方から論語義疏の総合的研究を図るものである。

## （二）本書の構成

本書は以下のように構成される。

序章 『論語義疏』研究の目的と本書の構成

第一章 旧抄本『論語義疏』の研究

## 第二章 敦煌本『論語疏』の研究

## 第三章 旧抄本『論語義疏』と敦煌本『論語疏』

## 第四章 『經典釈文』『論語音義』と『論語義疏』

## 附論

### 序章 『論語義疏』研究の目的と本書の構成

序章は、本論文の構成、研究の意図・目的などが示される。

### 第一章 旧抄本『論語義疏』の研究

日本に伝わる論語義疏(以下旧抄本論語義疏)には、そのすべてに論語義疏よりおよそ 500 年後に作られた邢昺の論語正義が記されている。そのことが旧抄本論語義疏の性格を複雑なものとしている。いったい論語義疏は何時日本に将来され、どのように伝わったのか。そうしたことを明らかにするため、日本の書目の記事、古記録に見える論語義疏の引文などを検証し、論語義疏が奈良時代には日本に将来されていたと推論した。

それではなぜ、誰が、何時論語義疏に論語正義が書き入れられたのか。この問題を明らかにするために、書き入れの一条一条からその答えを探しだそうと試みた。そこから明らかになったことは、論語正義が日本に伝わってまもなく、ある個人が、論語義疏の不十分な点、難解な箇所論語正義を書き入れることによって、より優れた注釈にしようとして企てたものと推定した。ただこの作業は完成を見ずに終わっている。中国において、邢昺が論語義疏から論語正義を撰述したように、日本には、論語正義を書き入れることで論語義疏の再生をはかろうと試みた人がいたのである。

この問題を考える際に障害となるのは、正義が書き入れられていない論語義疏が伝わらないことである。鎌倉時代に編纂された『論語総略』とよばれる卷子本一卷が京都曼珠院に蔵される。論語総略について、武内義雄博士は旧抄本論語義疏との異文を取りあげて、それを鎌倉時代の論語義疏と認める論を立てている。それに対しわたしは、論語総略所引の論語義疏が異なるのは、撰述者による書き換えの結果であって、鎌倉時代に通行していた論語義疏と旧抄本論語義疏との異なりを反映したものではないと考えた。さらに奈良時代、日本に伝わってきた論語義疏も、現在見ることができる室町時代に抄写された旧抄本論語義疏と同系統のものであったろうと推論した。

本章では、論語義疏の日本伝来時期、旧抄本論語義疏の成書過程、及び論語総略の性格を中心に論じた。

## 第二章 敦煌本『論語疏』の研究

論語義疏のもうひとつの異本が、敦煌本論語疏である。その中に「論語疏第二」と記されること、旧抄本論語義疏と記述に共通する部分があることから、論語義疏の異本と考えられる。残存するのは、学而、為政、八佾、里仁の各篇であるが、学而篇は冒頭部分を欠き、里仁篇は三章のみ、学而、為政、八佾各篇も、半数の章を欠く。しかし敦煌本論語疏からは、旧抄本論語義疏では知れないさまざまな特性を見て取ることができる。

敦煌本論語疏と旧抄本論語義疏とを比べた時まず気づくのは、旧抄本論語義疏が、経・集解の下に記述体形式の疏を繋ぐのに対して、敦煌本論語疏は、一章ごとの経文の後ろに、問答体形式の疏をまとめて記すことである。

なぜこのような異本が存在するのか、異本が生まれた理由、両本の先後関係、そのどちらが論語義疏の祖本に近いのか。

まず試みたのは敦煌本論語疏の全体像の解明で、敦煌本論語疏の分章、経文を論語諸本と比較した結果、分章については正義本と一致し、経文は、論語諸本と近く、旧抄本論語義疏とやや離れていることが明らかになった。

敦煌本論語疏の冒頭に見える「通釈」とよぶ疏について、王重民氏は、旧抄本論語義疏ではほとんど棄却されているとし、これを両本の差異とみた。この点についてわたしは、旧抄本論語義疏にも通釈が形を変えて残っていること、その通釈が、性格の異なる「章旨」と「梗概」とに分かれることを明らかにした。そしてこの通釈を手がかりに、敦煌本論語疏は転写本で、祖本が存在し、その祖本から改編されて旧抄本論語義疏の形になったと推定した。

敦煌本論語疏の特徴は、疏が問答体形式であることである。問答の疏から問いを起こす術語 16 語を採りだし、それを「提示句用字」と名づけ、その用法を整理、解明した。さらにこの「提示句用字」を手がかりに両本の記述を比較分析し、敦煌本論語疏の祖本が改編されて旧抄本論語義疏が作られた証拠とした。「通釈」「提示句用字」という注釈方式を手がかりにすることで、両本の関係はほぼ解明されたと考える。

敦煌本論語疏の「通釈」「提示句」という個別の問題を解明した後、敦煌本論語疏全文の解読を主とし、あわせて旧抄本論語義疏との差異を明らかにすることを試みた。いわば「敦煌本論語疏札記」である。

### 第三章 旧抄本『論語義疏』と敦煌本『論語疏』

わたしが敦煌本論語疏について検討を進めていたほぼ同じ時期の 1988 年に、中国で敦煌学を専門とする李方氏が、旧抄本論語義疏と敦煌本論語疏の関係について、旧抄本論語義疏を論語義疏の原型とし、敦煌本論語疏は論語義疏を講述した際の「講経提綱」であるとする論文を発表された。李方氏の論点は、わたしの推論とは、正反対のものである。この論文に反証する目的もあり、さら

にその後に明らかになった事柄などを加えて、旧抄本論語義疏と敦煌本論語疏両本の関係を総括的に論じたのが本章である。

#### 第四章 『經典釈文』『論語音義』と『論語義疏』

陸徳明（550—630）の『經典釈文』『論語音義』は、論語義疏について10条を引くが、それは唐代初年の論語義疏を窺うことができる貴重な資料である。

論語音義に引かれる論語義疏10条のうち、字音解釈や文字の異同に言及するのが5条で、残る5条は子罕、先進、子張三篇について篇内の章数と章の区切りについての異論を取りあげたものである。このたびの検討を経ても、論語音義に引かれる論語義疏の中になお疑問として残る条目がある。これの解明には新たな資料の出現を待たなければならないだろう。

經典釈文はその資料の性格上、つねに書き換えられる可能性を秘めている。論語義疏にかかわる10条についても、そのうちの4条は、現行の論語音義には見えず、日本に伝わる古抄集解本の書き入れの中から見出したものである。かつて清人の中に書き換えられた論語音義を根拠として日本から逆輸入された論語義疏偽作説を出した人がいた。こうした經典釈文という資料を扱う際の注意点についても本章で言及した。

以上、本書の第一章から第四章の論述を通じて、およそ1500年前に作られた『論語義疏』が、中国あるいは日本でたび重なる改修を受けながらも日本に現存している過程を明らかにし、旧抄本『論語義疏』と敦煌本『論語疏』にかかわる諸問題を解明しえたと考える。

附論として収めるのは、次の（一）から（五）までである。

- （一）呉騫『皇氏論語義疏参訂』十卷初探
- （二）『論語義疏』の二種の校本、根本校正本と武内校本をめぐって
- （三）日本における『論語義疏』の受容
- （四）『論語』『学而』篇「有朋自遠方來、不亦樂乎」をめぐって
- （五）『論語義疏』研究の道筋

（一）は、呉騫の『皇氏論語義疏参訂』についての二種類のテキスト、すなわち藤塚本と倉石本に関するいくつかの問題と、皇氏論語義疏参訂に加えられた修訂の記録と倉石本と藤塚本との異同を整理したものである。「校勘記」は、もと『續修四庫全書』（上海古籍出版社刊行）に収められたものである。

（二）は、旧抄本論語義疏の二種の校本、すなわち『根本校正本』と『武内校本』が持つ問題点、とりわけ武内校本に校訂の際に異文が混入していることを明らかにした。

（三）は、日本に何時、どのような形で論語義疏が伝わり、それにどのような

意図から論語正義が書き入れられたかということの大筋を明らかにした。

（四）は、『論語』学而篇「有朋自遠方來」の「有朋」が、論語義疏では「朋友」となっていたのではないかということを論じた。

（五）は、わたくしの東京外国語大学退官の最終講義「論語義疏と私」の記録である。論語義疏研究のきっかけからはじめて、論語義疏にかかわる問題点、さらにこれから解決しなければならない諸問題を示した。